

Fate/ staynight ifルート——戦士の生き様

banjo—da

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

f a t eにあの仮面ライダー達が参戦したら、という妄想です。一場面のみ切り取った単発、「いざれ連載するかも?」という構想の一部です。お気に召しましたら幸い。

目次

F a t e / s t a y n i g h t i f ルート——戦士の生き様

F a t e / s t a y n i g h t i f l o o t —
— 戦士の生き様

side 『S』

「はあ?!お前、今何て言った!?!」

薄暗い洋館、その一角。

一人の少年が青年に詰め寄る。

「何度でも言ってる。お前のやり方は到底承服出来ん。」

怒りに任せ睨み付ける少年に対し。青いライダーズジャケットに身を包んだ青年は、顔色一つ変える事無く逆に彼を睨み返す。

「そもそも、兄のクセに妹を平然と傷付けるお前の性根が気に食わん。俺を従えたければ、先ずその腐った根性を叩き直してやる。」

「お前、自分の立場分かってんの?僕はマスターでお前は所詮サーヴァント!お前がどう思っているようが、僕なら……!」

「——その令呪を用いて無理矢理従わせられる。だろう?好きにすれば良い。」

少年の言葉を遮り、青年は彼の肩を掴んで押し返す。

決して力を込めたワケではないものの、それだけで少年の恐怖心を煽るには充分だったらしい。少年はビクリと身体を震わせ、先の勢いが嘘の様に押し黙る。

寧ろ、目の前の存在がどういう物か理解して尚、気丈にも睨み続ける点は大したものだ——そう思いつつも、無論口には出さない青年。

「殺したければ殺せ、それで困るのはお前自身だ。命令を遂行させたければそれも構わん。——だが、その後お前がどうなるか……までは俺には責任は持てんぞ。」

冷たく、酷く威圧的な声音で青年は告げる。

暫しの睨み合いの後——先に折れたのは少年の方だった。

「……クソッ!後で泣いて詫びても知らないからな!」

side『B』

一面の雪景色。美しく、何処か恐ろしいまでの静寂を感じさせるその場に、獣の咆哮が響き渡る。

「はあ、はあ…。いや…。止めて、来ないで…！」

雪の様に美しい銀髪の、まだ年端もいかぬ少女。そんな彼女を取り囲む、文字通り飢えた狼の群れ。

「誰か…リズーセラ…バーサーカー！助けて！」

その場に居ない誰かに助けを乞う。だが、そんな少女の叫びも虚しく、応える者は誰一人として居ない。

「ウオオオオン！」

群のリーダーらしき一匹の雄叫びを合図に、狼達は一斉に少女へ襲い掛かる。

噛み付かれ、爪を立てられ、まだ小さな彼女の柔肌からいとも容易く血が流れた。

———自分はどこで死ぬのか。

聖杯の器として作られ。

聖杯を手中に収める為の道具として育てられ。

漸く召喚したサーヴァントは、想定していた大英雄ヘラクレスとはかけ離れたハズレサーヴァント。オマケにそんなサーヴァントからすら見限られるという屈辱の果てに———最期は、狼の餌として一生を終える。そんな自分のこれまでを振り返ると、溢れ出る涙が止まらない。

———嫌だ。

まだ、自分は何もしていない。自分の意思を示した事が無いまま終わるなんて、絶対に嫌だ。

彼女は悪足掻きに過ぎぬと知りつつも、咄嗟に雪を掴んで手近な狼目掛けて投げ付ける。それは狼の顔面に命中し、思わず怯んだ一匹が後退った。

だが所詮焼け石に水だ。この程度で狼達を退ける事など出来る筈も無い。———それでも、何もしないで殺されるよりは…！

「———合格だ。」

不意に辺りに響き渡る、男性らしき声。それと同時に、一匹の狼が宙を舞った。

反射的に少女がそちらへ目を向ければ。

赤いコートを身に纏い、鋭い視線を向ける一人の青年の姿。

その姿こそ以前少女が召喚し、彼女を見限った筈のサーヴァント。

「……バー……サーカー……？」

「フン。随分と時間が掛かったが……漸くだ。貴様は自らの意思を示し、敵に立ち向かう強さを見せた。意思を持たぬ操り人形という弱者から抜け出したワケだ。」

彼はコートを翻すと、狼の群れへと突撃する。

蹴り上げ、飛び掛かって来るそれを殴り飛ばし、瞬く間に無力化させた。

「……ドライバーを使うまでもない。」

「……何よ。私の事、マスターとして認めないとか言ってたクセに……！キリツグと同じように、私の事捨てたクセに！何で今更……」

「キリツグとか言う奴の事など知らん。俺が一度貴様を見限ったのは、貴様が詰まらん弱者だったからだ。——年端もいかぬ子供だとい

うのは関係無い。俺を召喚し、聖杯戦争なんて戦場に向かうつもり人間に……普通の子供と同じ扱いを期待する方が御門違いだろう。」

睨み付けるイリヤの視線を真っ直ぐに見詰め返しながら、さも当然とばかりに語る青年。その口調に迷いは無い。

「だが、貴様は強さを示した。——主に従うなど本当なら死んでも御免だが……特別だ。」

言いながら彼は少女の傍へと歩み寄り、ゆっくりと身を屈め。所謂お姫様抱っこで少女を抱え上げた。

「ふえ……!?ちよ、ちよつと……何するのよ!?!」

「イリヤスフィール……お前は強い。お前の強さに敬意を表し、俺はお前をマスターと認めてやる。」

彼が険しい表情を緩める事は無かったが。不思議とその声音は少し穏やかだった。

「……あれから随分経ったけど、バーサーカーの偉そうな態度は変わらないね。」

「フン。俺がそう簡単に変わるものか。」

「ハイハイ。知ってるわよ。私のサーヴァントは何時も上から目線で、自分のルール絶対で面倒臭くて、でも偶に何も無い所で足挫いたりする変なサーヴァント。」

「なっ…!?!」

尊大な態度でソファに腰掛けていた青年は、少女の言葉に思わず顔を顰める。

「時々気晴らしに踊ったりしてんだけど、妙に上手だし。でも偶に足上がってない時もあるし。如何にも俺様って感じの割に、お菓子作り上手で変な所女子力高いし。——あ、あと何故か亀好きだよなー。」

「——喧嘩売ってるのか?」

「え? まっさかー。」

口元をひくつかせる青年に対し、少女は白々しく言い放つと。

花開く様な満面の笑みを浮かべ——。

「バーサーカーは…カイトは、私の最強のサーヴァントでしょ? ちゃんと分かってますよーだ!」

悪戯っぽくウィンクしながら、上機嫌そうに鼻歌を奏でるのだった。